

明日の教室

於:京都橘大学 児優館 2010. 3. 13 13:30~17:00

第一講座:学級担任が行う合唱指導「旅立ちの日に」～「学級合唱コンクール指導」解題～

石川 晋 (北海道上士幌町立上士幌中学校、NPO法人授業づくりネットワーク理事)

zvn06113@nifty.com

<http://homepage1.nifty.com/maru-shin>

Intro 今回の研修会のこと (すぼんじのころ ブログをちょっぴり修正)

今回、ぼくが御呼ばれするにあたって、糸井登さんから頼まれた第一は、ぼくに合唱指導をしてほしいということだった。もちろん国語科の指導も見たいが、何よりもとにかく合唱指導を、ということだった。数度にわたる要請だった。まさに三顧の礼であった。もうことわれないなあ、と思ったのである。

しかも卒業期に合わせて、「旅立ちの日に」の合唱指導をしてほしいということだった。

それは、3年前に、野中信行先生の学級を訪問した折に、先生の学年の卒業合唱指導をしたことが、先生のブログ上で紹介されて、大変話題になった(というか話が独り歩きした)からでもあるだろう。『野中信行のブログ教師塾』(学事出版)にもその記事がそのまま掲載されているが、あれは、野中先生のリップサービスである。いくらなんでもほめすぎなのだ。そんな立派なものではない。ぼくが一番よくわかっている。

「旅立ちの日に」は、学年の子どもたちや全校の子どもたちに、ほんの少しだけ指導したことがある。

ほんとに、ほんの少しだけ、である。

ぼくのこの数年は、崩壊しかけた学級を中3の1年だけ担任した熱い1年間以外に、担任がめぐってくることはなかった。学級合唱も、卒業合唱も、力いっぱい指導する機会には恵まれなかった。頼まれて、各教室を回ったり、全体合唱を少し指導したり、そういうことの繰り返しなのである。

また、ぼくは音楽をなりわいとしている教師ではない。

ぼくは国語科の教師である。そして一般のすぐれた合唱団で歌ってきた(少しだけ指導してきた)経験とで、言葉にこだわる「学級合唱指導」をしてきたわけで、音楽的な専門性を追求するのなら、ぼくは全く適任ではないのだ。

また、改めて書くのは初めてだが、校内的なことであっても、ぼくは合唱指導について、言葉を選び、場を選びながら行ってきた。中学校には、当然音楽の先生がいらっしゃるわけだ。基本的に音楽の先生におまかせしておけばよい。ぼくの合唱指導は、学級担任として学級で取り組む場合を除いては、まさしく余技なのである。しかもぼくの年齢が上がってきて、いつの間にか同僚の音楽の先生は年下の方々ということも多くなってきた。いずれにせよ、人には分というものがある、また、人も動物でありテリトリーというものがある。わきまえて行動しなければいけない。

だから、ぼくの指導はあくまでも補完的で部分的なものとも思ってやってきた。

繰り返すが、学級担任としてなら話は別である。「学級合唱指導」ができるのは担任だけなのだから。

だが、糸井さんはそんなぼくに追い打ちをかけるように、ブログの中で、次のように書いておられる。

で、合唱である。

集団の歌声を聴き、その集団の歌声を拾い上げ、言葉をかける、説明する、指示を出す。いや、時には発問することもあるだろう。

でも、それは、「案」はあったとしても、きっと、その時に、教師の心の中に沸き上がってきた言葉のはずである。そこには、教師の「信念」が見とれるはずだと思っている。

それは、きっと、国語の授業以上に、寄り添う言葉になるはずだ・・・。

いや、ひょっとすると、突き放す言葉なのかもしれない・・・。

私は、その瞬間の石川晋先生を見たい。

そこに、石川先生の教師としての「哲学」が見とれるはずだと思うのである。

それを映像に収めるのだ・・・。

池田先生と、そして、映像をお願いしている平井さんと、DVD化の話をしていて、今、考えていること。

それは、決して、活字では見えないものを、映像で見せるということ。

ぼくはこれまでも、自分の学校以外の生徒に対して、合唱指導をしたことがある。

しかし、一人の教育人という立場で、研修会のような場所で、直接に合唱指導をするというのは、これが最初で最後になるだろうと思う。

とりあえず、ぼくが今までしてきたことをしっかり見せようと思う。

糸井さんがブログに書いていらっしゃるのと、ぼくの中での合唱指導とは、かなり違っているようにも思う。そのことは当日会場でお話ししようと思うが、いずれにしても、糸井さんの熱意に打たれた、ということだ。今日は半日、ぼくのクラス合唱指導と、平素の国語科授業を、できる限りに生に近い形で公開する。特に合唱指導は、二度としないだろう、人生一回限りの提案になる。

1. 合唱コンクールで担任に要求されること

合唱コンクールで担任に要求される最も重要なものは「音楽の指導力」ではない。実際、音楽科の担任が合唱コンクールで金賞を取れない場面も、20年近い教職員生活の中で何度も見た。

では、何が必要なのか。

これは、もちろん学級の生徒を指導するための、いわば「学級指導力」である。

指導力とは、では一体何だろう。

指導力とは、「技術力」と「感化力」の融合だ(ろう)。

3年ほど前にとある中学校で全道の進路研究大会の授業を見た。

中で一番おもしろかったのは、音楽室で行われたワークショップ型の中2の授業である。おもしろいと思ったのは、教師の授業運営や生徒の学習内容の深まりではない。

この授業では、途中からTTの先生が、協議運営の司会をする。それまで、担任の先生がワークショップ型授業の全体像について説明するのだが、生徒には今一つ落ちていない。原因がある。

- ・次の話し合いを早くしたいのに、先生の説明が長いこと。
- ・不慣れで広い音楽室で行っていることの「解放感」とたくさんの先生に見られていることからくる「緊張感」の妙なせめぎ合い。
- ・円陣を組んで座っているという隊形の不備。

担任の先生は、「静かにしなさい」という。先生の説明を聞いてもらいたいからだ。たしかに静かになる。しかし聞いているかという、表情を見てみると、2/3の生徒は、この説明早く終わらないかなと思っている(と私は感じた)。

ここを「技術力」で対応すると、例えば、岩下修氏の有名な指示「へそを向けなさい」になる。そうすると、身体がすべてこちらを向く。しかし……。

実はTTの先生にバトンタッチすると、状況が一変する。その年輩の先生が話し出すと、ほぼ全員が、その先生の方に身体をねじったり顔を向けたりして話を聞くのである。

ここにあるのは、「技術力」ではない。おわかりだろう「感化力」なのだ。

話を戻す。

指導力の中身は「技術力」と「感化力」である。そして、より重要なのは、絶対「感化力」の方だ。先述したベテランの先生のことと言えば、多分生徒たちは、この先生から「人間を学んでいる」、そういうことなのだ、と思う。

合唱コンクールなどの行事で立ち現れてくるのは、この「感化力」の方だ(ろう)。

生徒を感化する最も初歩的で有益な方法は何かということ、これは一緒にやるということである。

若い先生に生徒がついて行くその基本は一緒にやってくれるということだ。一緒に走ってくれる、一緒に歌ってくれる、一緒に遊んでくれる、一緒に泣いてくれる……。

しかし、年齢を取って身体が動かなくなると、一緒にやれなくなってくる。そして、それまでの学びの総合力がためされはじめる。35歳くらいからだろう。ここから決定的な差が生まれてくる。

だから、まず、若い先生方は、一緒に歌うことだ。合唱コンクールで一緒に歌わない先生のクラスがよい歌を歌っているのを見たことがない。小賢しい技術を駆使したところで、胸を打つ歌など、歌えるように指導はできない。

以上のことは、少々長いが前提なのである。

その上で、次からやや技術的なことを書こうと思う。

2. 技術的なこと

【音を取る】

音取りは、パートの数だけ楽器が必要である。当たり前のことだ。

通常中学校では混声3部合唱だろうか。それなら、自由に使える音取り楽器（通常はキーボード）を三台用意したい。

男子には鍵盤を操作できる生徒がいない場合がある。音取りができる女子生徒を一人配置したい。

歌える男子一名と音を取れる女子生徒一名の組み合わせである。女子生徒と一緒に歌ってあげても効果は薄い。音程は同じでも、音域が違うのだ。声の低い男子生徒の中には歌えない子が出てくる。音楽科の先生の多くは女性で、だから男子パートの音取りに苦勞する。私も頼まれて音取りのために何度か授業に入ったことがある。男子生徒の声をリードするのは、男声であることが望ましい。男性教師は、まさにここが出番だ。

音取りCDは、ある程度音が取れていないうちは、集団では使いにくい。使いにくい理由は、うまく音が取れないところを反復練習するのに手間がかかるからである。取れないところは一人一人違う。

ある程度パートで音が取れるようになったら、流して何度も練習するのには大変有効である。

つまり、音が取れるまで、個人で音取りCDを活用して家で練習する。これが、音取りCDの最も有効な使い方だ。去年は私の学級では、全員分をCDに焼いて、全員に持たせた。保護者の話では、生徒は毎日毎日、家で流して歌っていたそうだ。

【譜面を読む】

難しいことではない。

いくつか、基本的なことを教師が10個くらい覚えておけばいいのである。どんな楽譜の譜読みにも通用する基本である。それだけでいい。

【指導の言葉を工夫する】

指導言のポイントをお話すると・・・。

具体的に、適切な例示を伴って指導するということだ。

例えば、こんな感じ。

- ・「曲のはじめは、曲の顔。イケメンにしてください。」
 - ・「しっかり息を吸ってください。うんこは食べないと出ません。歌は吸わないと歌えません。」
 - ・色で説明する。→ 「ここは深い青で歌ってください。」「声をどんな色にしますか」
 - ・物で説明する。→ 「気球が上っていくように」「階段を一段ずつ上るように」「隣の教室まで聞こえるように」・・・
 - ・仲間を意識させる。→ 「となりの人を連れて歌いだそう」「隣の人の声を聞こう」「ソプラノの後ろの声が聴こえますか」・・・
 - ・聞き手を意識させる。→ 「誰に聞かせる？」「聞いて欲しい人はいますか？」「保護者はきみたちの歌を楽しみにしているよ」・・・
 - ・楽器にたとえる。→ 「チェロのように朗々と歌ってください。」「太鼓のように刻んで歌ってください。」・・・
 - ・「聴いてほしい人を思い浮かべてください。」
 - ・「サザエさんのエンディングのようにだんだん近づいてきてください。」
- などなど

【顔をつくる】

コンクールが終わったあと、学級の生徒が歌っている写真を比較してみると、歌声を聴かなくても、賞や順位がわかる。逆もまた真なり。顔から作るのである。

3. 語ること

【なぜ歌うのかを語り続ける】

まさに「感化力」が問われる場面である。学級担任に求められるのは、ここなのではないか、と思う。

ことあるごとに、自分たちの日常・現実・未来像、仲間、家族、そういったものを想起させ、結びつけ、価値付け・意味づけしながら指導していくことが大切である。

4. 合唱コンクール選曲のこと

中学校教育実践選書の27巻『行事のくみたと創造』（あゆみ出版）の中で神奈川県の中学校教師中村勝彦氏がまとめているものを紹介したいと思う。1983年の資料だ。全生研の実践家ということになる。???と思う部分、今も有効な視点、いろいろあって、とてもおもしろい。

【ごく一般的な選曲の観点】

- ①明るく、楽しい、元気のよい曲
- ②どの声部も旋律性のある曲を
- ③歌詞のよい曲
- ④生活のなかに生きていく曲

【合唱指導のポイント】

<一年生指導のポイント>

- ①元気でうきたつような曲を選ぶ
- ②最初は男声、女声を分けない
- ③細かい注意はあまりしないで、大きな口をあけて大声で歌う
- ④独唱を入れていく
- ⑤練習のしかたを身につける

<二年生指導のポイント>

- ①男声を独立させる
- ②どのパートも旋律性のある曲を選ぶ
- ③パートリーダーの指導力を高める

<三年生指導のポイント>

- ①芸術的表現をつくりだす
- ②指揮者を指導する

私が、他にあげて上げるとすると、次のようなポイントになる（努力目標、ね）。

- ①学級担任が、選曲のイニシアチブを取ること。
- ②歌いだしがユニゾンの曲を選ぶこと。
- ③1年生は歌詞が具体的で実際的なもの。2年生は自分やクラスの現状を内省できるもの。3年生はストーリーではなく抽象度の高い、詩として読むに足るものを。

5. 学級合唱コンクールへの取り組みを、日程の流れで捉えること

【合唱コンクール全体に関わる日程を捉える】

○まず全体的な日程を考えること

ex.2006年の合唱コンクールの日程例（この年は合唱コンクールに取り組む特別時間割期間までに学級の生徒はほとんど音が取れていなかった）

- ・ 8月30日（水） 学力テスト
- ・ 9月4日（月） 修学旅行出発
- ・ 9月7日（木） 修学旅行帰着
- ・ 8日（金） 修学旅行休養日
- ・ 10日（日） 福祉まつり（ボランティア委員会&吹奏楽部）
- ・ 11日（月） 前期期末テスト 国語 数学 保健体育・美術
- ・ 12日（火） 後期期末テスト 社会 理科 英語 音楽・技術家庭
- ・ 13日（水） 学力テスト（総合Aテスト）

- ・ 15日(金) 校内意見発表大会
- ・ 18日(月) 敬老の日
- ・ 19日(火) 文化祭特別日課開始
- ・ 22日(金) 柔道少年団全国大会出発(～24日)
- ・ 23日(土) 秋分の日
- ・ 30日(土) 文化祭準備登校
- ・ 10月1日(日) 文化祭(合唱コンクール)

○2週間の特別時間割の中で考えること

・期間中、練習全体に関わること

1. 誰に向かって歌うのかを問い続ける
2. 歌いだしにこだわる
3. 繰り返しの表現は変化をつける
4. 指導言は比喻を多用する
5. 練習方法のバリエーションを考える
6. 練習の記録をビデオやテープにとる
7. 中だるみを計算に入れる
8. 歌詞の授業をする(してもらう)
9. 教師も共に歌う。
10. 教師は拍打ちでイニシヤチブを取る。
11. 練習ポイントは前日に決まっている
12. 息を吸った時には、次のフレーズは決まっている
13. 音楽教師とすみ分けをはっきりさせる
14. 「表現読み」の前に「素読」を
15. 「譜読み」は「シナリオ読み」である
16. 歌い直しはその場です
17. 指揮者とピアニストを称賛し続ける
18. 組曲の一曲であれば、組曲全体の構成や位置づけを理解しておく
19. 学級通信で毎日状況を可視化する(保護者へ、生徒へ)
20. 風邪をひかない

・音を取るために(特別時間割前から突入直後)

1. 教室での実際の練習には、音取りCDを使わない
2. 女子のピアノの弾ける生徒を一名男子専属にする
3. 音取りは小節単位で取らせる
4. 教師も歌う
5. 音楽の授業の意識付けをする
6. ポータサウンドを活躍させる
7. 合わせは2パートで行う
8. 音が取れていなかったら、もう一度音取りさせる
9. トリオで音を取らせる
10. パートリーダー同士で相互乗り入れさせる

・聴きあいの習慣をつけるために(特別時間割開始後、最初の二週目前半)

1. 隣の人の声を聴かせる
2. 前後の人の声を聴かせる
3. 一番遠いところの人の声を聴かせる
4. 他の学級の練習を見に行かせる
5. 練習の感想交流と、頑張りの相互評価をさせる
6. 広い場所で距離を離して歌わせる
7. パートをばらばらにして歌わせる

8. 吹き抜けを活用する
9. 数名ずつ前に出させて聴かせる
10. 詩を読み合わせる

・一人で歌う気概をもたせるために（二週目後半）

1. ステージ練習をイメージさせる
2. 副担任の先生や管理職に聴いてもらう
3. 歌を聴かせたい人をイメージさせる
4. 広い場所にばらばらに立たせる
5. 客席に響く自分の声をイメージさせる

・気持ちよく歌うために（本番前2, 3日）

1. 最後の練習日の朝に、はじめて朝練習を入れる
2. 最後の練習日に姿勢をよくする
3. 最後の練習日に、ほんの少しテンポを速くする
4. みんなで拍手する
5. 自信になる言葉かけをする
6. 保護者にきてもらうように、自分の言葉で案内させる
7. もう一度歌詞を読む

6. 「旅立ちの日に」の沿革のこと

「旅立ちの日に」は、月刊「教育音楽」（音楽之友社）の1992年1月号付録として初めて公にされた。1995年には、楽譜として収録出版された。埼玉県秩父市立影森中学校で当時学校長であった小嶋登氏が作詞。作曲は同じ学校の音楽教員であった坂本（当時）浩美氏の作曲。混声3部合唱譜への編曲は松井孝夫氏。

2004年3月。フジテレビ「EZ!TV」で全国放送し、人気に火がつく。その後もCMなどでとりあげられるなど、認知度はどんどん高まり、卒業合唱の定番ソングとなる。

楽曲にまつわる沿革などは『「旅立ちの日に」の奇蹟～いくつもの“卒業”を経て、今響く歌声～ DVD付』（卒業式ソング取材班編、ダイヤモンド社、2940円）にくわしい。

石川 晋（いしかわ・しん／NPO法人授業づくりネットワーク理事、日本児童文学者協会会員、「研究集団ことのは」、日本野鳥の会会員（笑）／広尾町立広尾中学校教諭）

089-2622 広尾郡広尾町公園通南4丁目10-1 01558-2-3657（FAX兼）

zvn06113@nifty.com <http://homepage1.nifty.com/maru-shin/>

昭和42（1967）年1月北海道旭川市生まれ。学生時代より、授業づくりネットワークに参加。1996年～1998年、『日本児童文学』誌に上野瞭氏、奥田継夫氏と共に「映画の中の子どもたち」を連載。2002年、授業づくりネットワーク誌に「メディアリテラシーの定番授業」を連載。

【著書】

『中学校学級担任のためのポジティブコミュニケーションカード』上條晴夫・池田修・筑田周一（共著／民衆社）

『増補版北海道スノーハイキング』北海道の山メーリングリスト編（執筆／北海道新聞社）

『授業をぐーんと面白くする中学国語ミニネタ&コツ』（編著／学事出版）

『授業力の開発5 こんな板書が子どもの思考を発展させる 国語・社会編』有田和正・古川光弘 編著（執筆／明治図書）

『中1ギャップ』石川拓・高橋正一共著（執筆／学事出版）ほか多数。